

端末開発プラットフォーム「Obigo」 IMS対応携帯電話の製品化を加速

通信キャリアは「サービスプロバイダーである」と自身を再定義し、顧客を獲得し維持するために新規サービスの拡大を追及している。だが、それが受け入れられるかどうかは予測不可能である。この認識のもと、「絶対に必要な」サービスを編み出そうと必死だ。そのなかで、携帯端末開発のスピードアップは、新たな収益源を築くためのキーとなる。次世代のコミュニケーション機能「IMS」との関連を併せ、最先端の端末開発環境「Obigo」についてレポートする。

モバイルアプリケーションは、SIP (Session Initiation Protocol) という新しい規格にもとづいて、IMS (IP Multimedia Subsystems) と呼ばれる一連の新しい機能によって新たに拡張し統合されようとしている。そうして作り上げられるアプリケーションは、サービスプロバイダーやモバイルキャリアの事業領域を広げ、収益モデルと市場環境を変化させ、新たなビジネスチャンスを生み出す可能性を秘めている。

ユーザーの立場から見れば、コミュニケーション環境の刷新が間近に迫っていることを予感させられる。個人と個人がリアルタイムに、IPベースのマルチメディア通信を容易に経験できる環境である。例えば、複数プレイヤーが参加するネットワークゲーム、プッシュ型のコンテンツ配信やコミュニケーションなど、より高機能なアプリケーションやコンテンツが提供される。エンドユーザーはこれまでにない新しい魅力的なサービスを、数多く体験できるようになるはずだ。

Obigoプライベートセミナー開催

Obigo 新サービス&テクノロジー セミナー

日時：2006年1月31日(火) 12:15 - 18:00
場所：スウェーデン大使館
ゲストスピーカー：英ボードフォン、クアルコム ジャパン、米インテル
参加費：無料

URL : <http://www.teleca-japan.co.jp/event>

こうした理由からIMSは、次世代マルチメディア端末の開発と、オールIPネットワークの構築に弾みをつけると考えられている。高速なIP通信サービスの普及に向けた3G (第三代) 携帯電話の規格とも密接な関係にある。このため携帯端末メーカーと携帯キャリアの双方は、IMSに対応するための多額の投資を続けている。

IMSは柔軟性と高機能を両立

IMSは、従来のネットワークとは違う柔軟性や機能性をもっている。1つは、加入者のプロフィールと複数のネットワークサービスとを相互に関連付けできるよう設計されている点。これにより、従来異なるネットワークと管理システムを介して提供されていた音声通話やデータ通信サービスが、シームレスに素早く開始できるようになる。

また、加入者が屋内から屋外に移動しても、サービスをローミングすることで、同じレベルのサービスを維持できるようネットワークが構築される。利用者は通常の通信サービスはもちろん、動画などのリッチコンテンツを場所を選ばず体験できる環境になるだろう。それには、電話

番号やアドレスなどのデータを統一した上で、ネットワーク・オペレーションを実行することになる。結果、通信事業者は課金や顧客管理を一元化でき、オペレーションコストの削減というメリットも享受できるようになるはずだ。

さらにパケット交換型のデータ通信インフラではQoSの改善が進み、移動網と固定網のギャップが縮まる (FMC: Fixed Mobile Convergence)。これにより、HSDPAに代表されるブロードバンドアクセス、VoIP、Wi-Fi等の公衆無線LANサービスが、より少ない投資金額で実現可能となる。固定および移動通信事業の参入障壁が低くなり、通信市場の活性化を促すことも予想できる。

個人と個人、個人とコンテンツ、個人とグループの間の、高度にパーソナライズされたサービスの提供。そのためJava、XML、SIP、マルチメディア/QoSを駆使したシームレスなコミュニケーション。IMSがユーザーにもたらすこれらの利便性や快適さは、新たな需要を創出すると期待できる。

IMSの価値を引き出す端末開発

通信システムのユーザーは、多様なチャンネルで、登録情報、エンターテイメント、その他の豊かな内容のサービスを受けることに慣れつつある。市場を形成しているのは、消費者と企業を含む「通信サービス活用コミュニティ」である。サービスプロバイダーや通信キャリアは、このコミュニティが今後、こういったアイデア、コンテンツ、経験、生き方を共有したいかについて、常にリサーチし続ける必要がある。

ニーズは多様かつ短期間で変化する

そのため、それに対応したビジネスもすぐに陳腐化し、利益を得られない構造に陥る。通信端末メーカーには、新しいビジネスモデルに対応した端末を、短期間で次々に、開発コストを抑えながら作り出す責務が課せられることになる。しかも、市場の新しいニーズを満たすには、従来にない高度なアプリケーションを、端末とセットで実現していかなければならない。

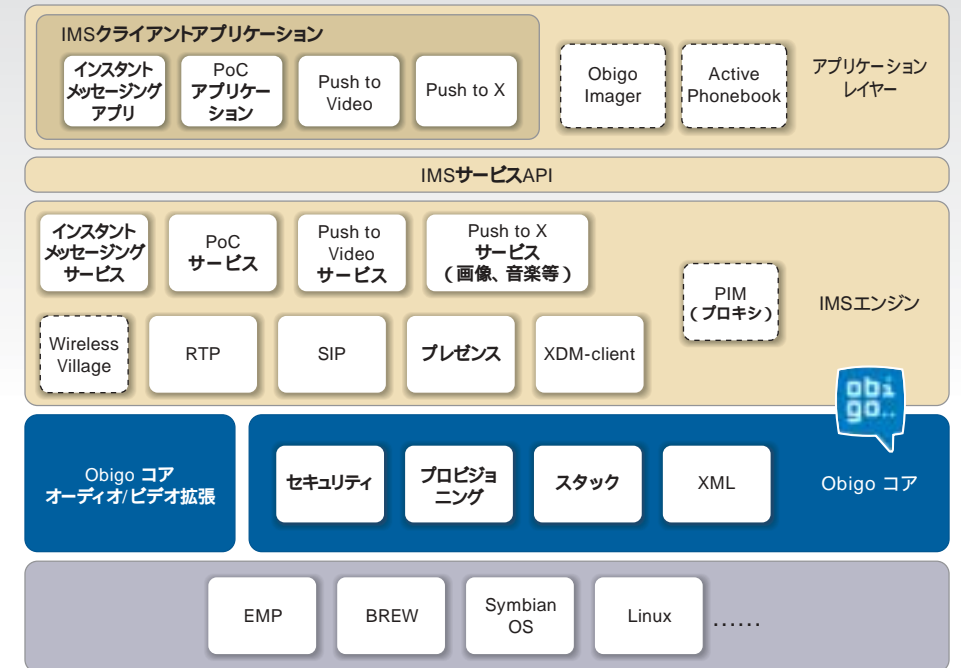
これまで端末メーカーは、独自のアーキテクチャーに基づいて端末を開発してきた。だが、高まる要求に応えるには、新たな開発手法やフレームワークの構築が不可欠となってきた。

PoCも完全サポートするObigo

テレカ社では、携帯電話向けアプリケーションの開発・実行プラットフォーム「Obigo」(オビゴ)を提供している。Obigoは、WAPやHTMLに対応するブラウザ、ショートメールやマルチメディアメッセージ、電子メールにも対応するメッセージング、マルチメディアファイルのダウンロードと保存に関わるコンテンツマネージャ、予定表やアドレス帳等のPIM(Personal Information Manager)など、携帯電話端末に必要なアプリケーション機能をすべて提供するとともに、チップセット等のハードウェアやOSなどプラットフォームの違いを、すべてのアプリケーションが共通に使うコアのフレームワークで吸収する。

OS、ハードウェア、ネットワークに依存しないため、市場で使われる多くの携帯端末に実装できる。また、OMA (Open Mobile Alliance)をはじめ、3GPP (3rd Generation Partner Project) やIETFなどの国際標準規格に準拠。世界のあらゆる携帯端末のアプリケーション開発に適用できる。

IMSに対応するテレカ製品



そのObigoにも、いち早くIMSアプリケーションが追加された。IMSとは、本格的なリッチメディアを可能とするための、PoC (Push-to-Talk over Cellular)、音声通話、Push to Video、音楽や画面などのPush to X、IM (Instant Messaging)等の機能の総称である。これらの多彩なアプリケーションも、Obigoを使えば短期間で構築できる。

PoCは無線端末を使ったシンプルな半二重双方向通信サービス。ユーザーはトランシーバーのように、1つのボタンを押して話し、ボタンを離して聞く。新たな電話番号を暗記したり、複雑な操作を覚えたり、メニューを選択する必要さえない。すでに欧米では爆発的に利用者が増えており、最近、日本の携帯キャリアもサービスを開始しているが、ObigoのPoCクライアントはOMA標準仕様準拠に加えて、今日の主要なベンダーのサーバー製品との間で接続試験を行っている。

このようにObigoは、マルチメディアデバイス用のユニークなモバイルアプリケーションシステムなのだ。Push to Video, Push to Xなど、PoCに続く他

のIMSアプリケーションもすでに研究開発が進んでおり、標準仕様の策定状況や通信事業者のサービス戦略にも歩調を合わせながら、市場にリリースされるのを待っている。

IMSや他の技術を利用して市場を牽引し、成長を達成するには、「右へ做え」のサービス提供では駄目だ。差別化はビジネスの成功に不可欠である。と同時に、利用可能なサービスを過剰に用意しても、それ自体が顧客の引止め策にはならない。短期と長期、両方のサービスに、迅速な導入と的確な管理が不可欠なのだ。

その際、携帯端末の開発は大きな要因となる。開発サイクルを短期化し、新サービスの投入サイクルを早めれば、チャーンアウト (加入者の他事業者への乗換え) の抑制は可能になる。IMSの浸透とともに、端末開発の重要性はますます増していくだろう。

お問い合わせ先

teleca

日本テレカ株式会社
東京都港区新橋2-2-9 NTB・Mビル8F
TEL : 03-3539-2700
URL : <http://www.teleca-japan.co.jp>